

初めてだらけだったイベント・ホライズン・テレスコープによるブラックホール画像発表、その舞台裏。

高梨直紘 (東京大学) / 平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

イベント・ホライズン・テレスコープ (EHT) が撮影したM87中心のブラックホールの画像、皆さんお楽しみいただけましたでしょうか。筆者(平松)はEHTに参加した南米チリのアルマ望遠鏡の広報担当として、この世紀の発表をお手伝いする機会に恵まれました。

はじまりは昨年9月、アルマ望遠鏡のパートナーである欧州南天天文台の広報室長から届いたメールでした。曰く、2019年の早い時期にEHTの成果発表があるので、記者発表の準備を始めとのこと。日本でも急いで研究チームに連絡を取り、そこから調整と素材の準備が始まりました。画像や映像などは各国で手分けして作る。どんな素材を誰が準備するのか、国際広報チーム20名以上が集うビデオ会議で何度も議論を重ねました。

並行して、記者会見を世界同時に行うための調整も始まりました。ワシントン・ブリュッセル・東京・台北・サンティアゴで

の同時会見は、時差もあって調整は簡単ではありません。まず時間帯をどうするか。欧米にとって良い時間にするとどうしてもアジアは夜になってしまいます。あまり遅いと、翌日の新聞朝刊の印刷に間に合いません。アジア側からはできるだけ早い時間にしたいという要望を何度もあげて議論しましたが、結局ワシントン朝9時、東京夜10時に会見を開始、観測画像を見せるのは会見開始から7分後、ということに落ち着きました。他にも例えば会場をインターネット回線をつないで互いに顔を見せ合うことで国際協力プロジェクトであることを示したらどうかというアイディアもありましたが、技術的に煩雑になることから断念。

今回、私は充実したプレス向け資料を準備することを心に決めていました。それは、重力波初検出が発表された記者会見での驚くほど立派な資料群を見て、いつか自分もこういうものを準備してみ



すでにおなじみ、M87ブラックホールの影。
Credit: EHT Collaboration

たい、と思っていたからです。プレスリリース本文だけでなく、画像、映像、よくある質問と回答、ブラックホール研究の歴史まとめ、科学館向けポスターや漫画など、研究チームの皆さんのご協力を仰いで準備することができました。本当はもっと作りたい資料もあったのですが、なかなか難しいものです。

紙幅が尽きてしまったので、会見当日やその後の反響についてはまた再来月以降に。